

18世紀フランスにおける演奏記録装置の考案

—M.-D.-J.アングラメル『トノテクニー』(1775年)、『オルガン製作技巧』への寄稿(1778年)を中心に—

鈴木 裕子

18世紀のフランスで盛んに製作された自動演奏装置は、木製の円筒のシリンダーの表面に打たれたピンの配置によってプログラムされていた。やがて細やかな音楽的效果の再現までも、ピンの配置の精緻化によって試みられる様になり、それを応用して演奏記録装置を考案したのが、修道士M.-D.-J.アングラメルであった。彼は著作『トノテクニー』(1775年)と、『オルガン製作技巧』への寄稿(1778年)において、記録媒体としての楽譜の限界と、下手な演奏者による音楽作品の歪曲の問題を指摘する。そして優れた音楽家の音楽をいわば無媒介的に記録・保存・再演するために、記録媒体としてのシリンダーに注目する。彼は手回しオルガンの仕組みを応用し、ハンドルに取付けたダイヤルの目盛りにより、曲を構成する音符の音価を換算し、ピンを打つ場所をシリンダーに記す革新的なダイヤル式シリンダー記譜法を考案する。彼の目的は音楽家の「真の天分」の記録にある一方、楽譜を基に趣味をもって効果を加えながら演奏する音楽家と同じ役割を、シリンダー記譜家に期待する。そしてオルガン奏者バルバトルの《ロマンス》の記譜を試みる。しかし例えばアングラメルの、一音符を構成する持続部と無音部の長さの判断は余りに複雑である。そもそも音楽家の演奏の音価は厳密に数値化されるものでもないが、精密な音楽記録装置の考案により、対象となる音楽も精密化して捉える事となったのではないか。当時の諸外国においても、音楽家の演奏を直接的に記録する「アナログ的」な試みがあったが、彼が考案したのは、音符の音価をダイヤルの目盛りに換算する「デジタル的」な方法であった。彼にとって、記録すべき音楽家の「真の天分」とは、趣味をもって練り上げる理想像であったのであり、寧ろこうした作業を介在させる事が「真の天分」の記録を意味していたのではないか。そしてそれを機械に記録し機械が再演する事で、天分が最も純粹に保存されるのである。